

☆地域包括ケアふじえだプロジェクト☆

平成30年12月13日 VOL. 84

第7回 医療・介護・福祉フォーラム 2018 今年もテーマは「看取り」

志太医師会・市・市立総合病院 共催

平成30年12月9日(日)志太医師会と保健センターを会場に、「**平穏な最期を迎えるために ～様々な立場から考える～**」をテーマにフォーラムを開催しました。これは第6回フォーラムの「病院以外での様々な看取り ～在宅療養における課題～」を更に深める「看取り」シリーズ第2弾。今回は4者の立場からの講演後に、意見交換会を行いました。

「看取り」に関する多職種・多機関からの症例や取組みの講演

かかりつけ医の立場から

三輪医院 三輪誠医師

「人は医療のみでは生きられない」「医療よりも介護」。しかし「医療なき介護も不安」

だからこそ、かかりつけ医は有識者としての知見を示し、家族を安心させ、苦痛時の緩和医療を行い、家族や介護スタッフからの相談を受けるものと講演しました。

介護施設の立場から

社会福祉法人鳳会ふじトピア

前島桂子氏 内村宣子氏

気配り・心配り・目配りにより「この時この場はあなただけ」

の思いに加え、「私たちは生活の伴走者です」とご本人と家族が主役であることを伝えました。

病院勤務医の立場から

市立病院緩和ケア科 吉野吾朗医師

「人は必ず死ぬ」と頭でわかっているも心ができることは難しい。「余計なことはしないが精一杯やる」という医療者の覚悟と信念について講演しました。

終末期医療川柳
死ぬときはモニターなんかいりません (吉野作)

ケアマネジャーの立場から

社会福祉協議会 柴田俊枝氏

ケアマネ歴9年の経験の中から、94歳女性の自宅における看取りまでの経過について講演しました。最初はディサービス、その後、訪問介護と訪問看護を利用しながら、穏やかな顔での最期に寄り添いました。

参加者130人が17グループに分かれて意見を交換しました

意見交換会は医師・薬剤師・リハ職・看護師などの医療職に、社会福祉士、介護福祉士などの介護職やケアマネ、さらに一般市民などを含めて、6～7人で行いました。

参加した医師からは「一般市民と話ができて新鮮な経験」という感想が、市民からは「多くの人が支えてくれることに感動しました」という声があり、さらにそれぞれの立場から想いを伝えあうことの意義を確かめ合う機会となりました。

志太医師会在宅医療サポートセンター杉浦正司センター長より、**市民全体が「平穏死」や「看取り」について考えることが大切**であり、今後は地域へ出向いて小単位でのフォーラムを開催していきたいというまとめがありました。

今回初めてグループに分かれての意見交換を行いました。ほとんどの参加者が「良かった」とアンケートに答えており好評のフォーラムとなりました。今後も対話を大切に、市民が参加できる会を企画していきます。

